

第13回スポーツ少年団指導者全国研究大会
特別講演：「日本におけるジュニアスポーツについて」

演者：ニール・スミス氏（NPO法人グリーンスポーツ鳥取代表）

私は、ずっとスポーツに非常に興味があり、いろいろな形でスポーツに携わってきています。自分の経験 - 独断と偏見も入れて - から日本のスポーツのあり方について自分の結論に達しています。今日はその結論についてお話しさせていただきます。

日本のスポーツ界に対するかなり厳しい結論です。本日、お示しする材料の裏には、たくさんの資料や経験が含まれています。

さて、特別講演のテーマは「日本におけるジュニアスポーツについて」です。

スポーツとは何でしょうか。英語の「sport」は、英英辞典によると「pleasant pastime = 時間を楽しく過ごす」という意味です。日本語の広辞苑では、「肉体的鍛錬、競争」という要素が入っています。ですから、元々出発点が違います。私が「sport」と聞いて直感的に考えることと、皆様が「スポーツ」という単語を聞いて直感的に理解されることは根本的に違うのです。

楽しければたくさん参加します。楽しくなければ続きません。ですから、たくさんの参加者の中から必然的に強い選手が生まれます。日本のスポーツのあり方では、楽しさは重要視されていないので、少人数でもいいから強化選手育成プログラム等を組んで、とにかく強い選手をつくらうとしています。

それは目標なのか結果なのか。実は大きな違いがあります。私の結論は、「強い選手が育つのは結果」が で、「強い選手をつくるのは目標」は×です。日本のやり方が正しいとすると、「強い選手をつくっているのか？その目標を達成しているか？」という質問になります。私に言わせると、世界級の選手の定義は、サッカーでいうと、W杯で優勝経験のある国の強豪チームで最低3年間1軍のスタメンに入る選手です。この定義では、日本のサッカー選手には1人も世界級の選手はいません。これだけお金をかけて、底辺から組織的にやってきて、競技人口はたくさんいますが、世界級の選手が1人も誕生していません。

ラグビーも同じです。どこと試合をしても、大差で負けています。どうして強くないか、よく言われているのは、体格差、競技人口の少なさ、歴史の浅さですが、ラグビーにおいて日本代表チームと対戦国のデータを比べても大きな差はなく、これらの要因ではないと

言えます。

では、なぜ日本のラグビーは弱いのか。サッカーでも、なぜ世界級の選手が誕生していないのか。これは私の独断と偏見による結論ですが、練習のやり過ぎ、季節のなさ、合わない設備で練習や試合をする、この3つが一番大きな要因ではないかと思っています。練習をやり過ぎると楽しさがなくなり、身体に対する負担も大きくなります。

例えばニュージーランドの高校ラグビー選手ですが、ニュージーランドは4月～9月の6ヶ月間だけがラグビーシーズンです。週2回1時間半の練習で、試合は土曜日、試合の前日・翌日は練習をしないというのが原則です。日本のある強豪高校は、1年のうち休みは20日間で、345日、1日5時間練習していると言います。練習時間はニュージーランドの約20倍、1,500時間にもなります。では、日本の高校選手が強いかというと、強くなっていません。

日本には四季がありますが、スポーツに四季がありません。1年中同じスポーツをやっています。これは学校の部活でもスポーツクラブでもスポーツ少年団でも同じで、基本的に同じ種目を1年中やっています。

ヨーロッパ諸国では、冬場のスポーツと夏場のスポーツは全然違います。学校では夏冬1種目ずつ行わなくてはいけないので、最低2種目、時間が許せば3種目以上やります。どの種目も多くて週に2回しか練習しません。それによって可能性をつぶすということを言われますが、運動神経のいい子どもは、いろいろなスポーツをやってもうまくできます。

熱中症に関する話です。1年中やるというのは危険だと言いました。日本体育協会の基準では、気温27度・湿度70%以上になると、「特別な場合以外は運動を中止する」とあります。わかりやすい表現ですが、誤解される可能性があるのは、「特別な場合」というところです。「日々の練習は特別ですか？」という質問をしたいと思います。もしそうでないならば、どうして中止しないのですか。

この結果がどうなっているか。この25～26年間で、部活中に熱中症で死亡した子どもの数は135人です。責任追求をするつもりはありませんが、指導者は罪の意識を感じないのですか？指導者の資格を取得する時に、熱中症対策の資料が配られています。それを無視した結果、事故死なのです。ちょっと違うのではないですか。危険だと、やめろと言われてながらも続けた結果子どもが死んだことのどこが事故ですか？

私は外のスポーツは全部芝生でやるべきだと思っています。

この写真は日本の学校です。周りは緑豊かです。校庭だけが土に戻されています。ニュージーランドの高校は土がありません。日本の学校とニュージーランドの小学校、どちらが子どもにとってよい環境でしょうか？

「運動会をやるから芝生はだめです。」とよく言われます。しかし、芝生の上でも子どもは気持ちよさそうに走っているように見えます。芝生の上で裸足でただ遊んでいます。この子ども達は体を動かしているから、基礎体力がつきます。

ラグビーをやる環境としては（サッカーでも野球でもソフトボールでも何でもいいのですが）どちらがいいか？答ははっきりしていると思います。

最近、芝生化の理由は地球温暖化防止等いろいろ言われています。私はそれを否定はしませんが、最も単純な理由があります。スポーツは楽しい、体を動かすのは楽しいと思ってほしいから、ということです。楽しい、気持ちいい環境を提供すれば、子どもは言われなくても必然的に体を動かします。

芝生の一番いいところは、転ぶ恐怖心を生まないことです。転んだらけがをするという恐怖心が日本の子ども達にはあります。（芝生の上で）この子どもは補助輪を外して初めて自転車に乗ろうとしています。顔が不安だらけです。お父さんが手を離したら案の定横転しましたが、子どもは「気持ちいいー」と寝転んでいます。次の瞬間自転車にまたがって、20～30分でうまく乗れています。自分の体が本能で対応できるのです。転ぶ、痛くないというのは理屈ではないのです。

これがスポーツではどうなるかですが、もし柔道をコンクリートでやったらどうなりますか。私に言わせると、サッカーもラグビーも土でやるのは、柔道をコンクリートの上でやるくらい異常です。もし、柔道をコンクリートでやった場合、どうなりますか。当然けが人が多くなります。けがを恐れて、競技人口が減ります。倒れたくないから内容が段々単調になり、受身になって積極的に技を仕掛けなくなります。最終的に、世界の国々が畳でやっている中で、10年ぐらいで日本は全く通用しなくなると思っています。日本のラグビーやサッカーも同じようなものです。通用しないのです。

ラグビーはどうして弱いのか。これはプロ選手がタックルされている写真ですが、プロ選手だから練習も試合も芝生で行っています。試合では、レベルが上がるほどとっさの判断が必要になり、本能で対応することになります。頭では芝生は痛くないとわかっていますが、土で育った人間だから、本能的に痛いというのが先に立ち、下を見えています。この

人の頭の中には、ボールを出すべき人の存在が入っていません。

日本は、サッカーでもスライディングタックルが下手です。固い土の上でそんなことをさせたら出血しますから、子ども達にスライディングタックルを教えられないでしょう。ですから、どれだけ練習しても土の上ではうまくなるどころか、下手になっていくのです。そのスポーツに合わない設備だからです。

日本では、「芝生は高い」と誤解されています。芝生はいろいろなランクがあって然るべきですが、日本にはそれがありません。芝生とは、頻繁に刈って刈り込むことによってできる絨毯のような形状が芝生なのです。草でも芝でもどうでもいい、中身は問いません。

国立競技場の芝生は、設置費用は何千万円もかかっているだろうし、維持管理費用は2,000~3,000 円/m²かかっているでしょう。我々が鳥取で管理しているグラウンド(グリーンフィールド)は、設置費用が2万m²で150万円です。1年間の維持管理費用が50円/m²です。見た目は余り変わりないですが、ここには雑草がいっぱい生えています。

どちらの芝生にするかは、利用者のレベルに合わせて決めればよいと私は思います。近所の子供達遊ぶ場所では、20~40 円/m²で十分ではないですか。子ども達に高級な芝生は必要ないのです。

これは、私がグラウンドを作った時の写真ですが、4年半前は、草ぼうぼうの状態でした。そこから、地元住民の力で石を拾い苗を植えました。芝生を張ろうとすると、2万m²分の芝を買わなければならずお金がかかるため、今、ポット苗方法、鳥取方式と言われている芝生づくりを提案しています。パミュダ系ティフトンという夏芝の茎を、25個入りの植木鉢に差し込み、肥料、水をやって育てます。6週間ぐらいで500円玉の大きさにふさふさになるので、それを土にちょっと穴を掘って40~50cm間隔で植えます。

どうして高麗芝ではないかという、高麗芝は成長が遅いからです。利用が激しい場所、校庭やサッカー、ラグビーをやる場所では、成長が遅い芝では痛んだ芝が回復しません。回復力がないものは痛みっぱなしで、状態が悪くなっていきます。サッカー場に高麗芝というのは合わないのです。適材適所ということです。ティフトンの特徴は成長の早さです。

維持管理はどうかといいますと、毎週1~2回、伸びたら刈るだけです。2日に1回でも1週間に1回でもいいのです。計画していません。見て「ああ伸びた、刈ろう」という単純発想です。芝生というのは刈れば刈るほどよくなるので、時間が経てば密接したふかふかの本当にいいじゅうたんになります。

余談ですが、スポーツクラブのあり方で、海外と日本が一番大きく違うのは、クラブとチームの違いです。日本はラグビークラブが 4,050 あって、1 クラブ当たりの人数は 30 人しかいません。ニュージーランドのラグビークラブは 700 しかないのに、1 クラブ平均の会員数は 250 人です。250 人を年代別にしてチームを組みます。学校も同じ形態でやっています。試合は、1 軍同士、2 軍同士、同じレベル同士で試合をします。

ですから、下に行けば行くほど練習回数は少なくなります。4 軍ぐらいでは、単なる遊びでやっていて上を目指していません。1 軍は技術も能力もあり、上を目指そうという子ども達です。運動神経が悪い、足も遅い、体格も余りよくないけれども、ラグビーが好きという 4 軍の子どもを無理に 1 軍に入れたらけがをするし、嫌になってやめます。他にチームをつくらないと、そういう子どもはラグビーができません。日本のやり方ではやる場所がないのです。

私のところではサッカークラブがあります。小学校それぞれの学年で練習内容が違います。運動能力も発育・発展段階も違うから、同じことをやらせてもできないのです。ただの草原みたいに見えるところで雑草だらけでも、適当に刈っていれば、みんな楽しくできます。親もそこに座って見たり、そういう雰囲気になればもっとスポーツが楽しい。本来の、私が思うスポーツはこうあるべきという楽しさです。

私のクラブは、2002 年の 12 月に 6 人の小学生からスタートして、今や会員数は 122 人になります。強くなるかどうか疑問です。週 2 回 2 時間までしか練習させていません。それで週末に試合をします。結果はどうかというと、去年の県大会では予選敗退しましたが、負けた相手は準優勝チームでした。鳥取県東部ではサッカー少年団が 30 チームありますが、たった 4 年間で 1、2 を争う強豪になっています。

ここではラグビーもやっています。ラグビーの練習は結構きついです。6 年生から幼稚園児までみんな笑顔で楽しんでいます。これで強くなるかどうか、ですが、参加資格が 4~6 年生のタグラグビー大会に、幼稚園児も含むチームで出場して優勝しました。奇跡だと思われるかもしれませんが、私は思っていない。当たり前だと思っています。

なぜか。運動能力が芝生だとどうなるか。なぜ海外の人間が 1 秒 2 秒速く走れるのか。歩幅がすごいのです。筋肉もないしバランス感覚はそう育っていないですが、倒れてもどうでもいいから全力で走っています。

日本の子ども達は全力ですが、条件付きの全力です。その条件とは転ばないこと、です。転んだらけがをするから、転びたくない気持ちが強いので、転ばない自分の最速のスピー

ドでしか走らないのです。

海外の子ども達は転んでもどうでもいいから、最初から大胆な歩幅で、絶えず自分の限界に挑戦しています。それがいい意味で身体の癖になっています。

これは、幼稚園から高校生までの50m走の日本と欧米の平均を比較したのですが、やはり差があります。私のラグビークラブには、すごく速い子どもがいますが、欧米のタイムよりはるかに遅いです。ということは、土で育った環境では、基礎体力は外国の選手には絶対に追いつかないということです。体格ではなく基礎体力、元々の走れるスピードが違います。

要するに芝生だと土より早く走れるものなのです。特に速いというわけじゃなくて、速く走れる環境だから速く走っている。でも海外にはまだまだ追いつかない。そうすると海外選手に試合の最後で走り負けするのは当然です。

「芝生にしてはいけない」といろいろ反対意見を言われます。「湿気があるから」とか「島国だから日本では芝生は育たない」とか言われたことがあります。ニュージーランドも島国です。赤道から同じ緯度の国は全部湿気があります。

他にも「野球の内野は土だろう」、「駐車場に使うから芝生にできない」、「水道代がすごくかかるから」、あるいは「芝生の手入れには手間と金がかかるから」と言われます。当たっている反対意見は「芝生の手入れには手間と金がかかるから」の1つしかありません。これ以外の3つは、はずれています。

これはアメリカの高等学校の野球グラウンドの写真ですが、内野はどう見ても土ではなく芝生です。野球のグラウンドがどうあるべきかというのを議論するときは、本場を見てから話をして欲しいです。

「駐車場に使うから芝生にできない」ということですが、私のグラウンドでは、毎年7月の納涼祭の時に500台ぐらいの車がグラウンドに駐車します。夜には芝生がやられてひどい状態になりますが、翌朝には回復しています。芝生というのは状態がよければ回復するのです。

「水道代が高いから」とよく言われますが、プールと比較すると、プールの設置費用は大体1億~2億円の費用がかかります。年間の水道代は、東京都のある市では200万円かかるそうです。校庭を芝生にした場合どうなるかというと、設置費用は、約5,000㎡を一番いい方法で作った場合1,000万円です。一番安い方法では、10円/㎡なので、ただ同然

です。水道代はだいたい半分ぐらいです。

まとめですが、物事には完璧ということはありません。長所短所は当然あります。土の長所は傷まないところです。芝生の短所が傷むところだと日本では認識されています。土の短所が転んだらけがをすることです。芝生の長所は転んでもけがをしないことです。

実は、この長所短所というのは間違いがあります。これは表裏一体なのです。土が傷まないから人間の体が傷むのです。ですから、本当はこれは土の短所なのです。同じ理屈では、芝生が傷むから人間の体は傷まないのです。人間の体が傷まないのが長所ならば、これも当然長所になるのです。

ここで芝生に対する基本認識ですが、傷むからいいのです。傷まないように管理するのは間違っています。傷まないように管理してもらいたいのは子どもの身体なのです。

そこで、どちらにするかと考える時は、スポーツクラブの運営者でも学校関係者でも、「芝刈りをしなくてはならない」、「補修しなくてはならない」、「手間と金がかかる」という自分の都合が優先するから土がいいと言います。もし利用者（この場合は子ども達）のことを考えれば、それでも土を選ぶ場合は、私に言わせると価値観が間違っています。はっきり申し上げますと、子どものことよりも自分の都合が大事だと思う小学生の指導者は、子どもの指導をする資格はないと思っています。まず子どもの身体が一番大事でしょう。

しかし、残念ながら日本では子どものことよりも自分の都合の方が優先されているのが実態です。そうでなければ全部芝生になっているはずですが。私の活動は必要ないのです。

この活動をいつやめるのかとよく聞かれます。夢は何ですか、と。夢は全国の1億3000万人の人間が「傷む？別にいいよ、たかが芝生。どうってことないよ」と、ごく自然にそういう認識を持つようになった日に、グリーンスポーツ鳥取をたたむことです。私は何もしなくて済みます。これはボランティアです。グリーンスポーツ鳥取は非営利団体で、理事は無報酬です。ですから、早く全国の人間が「たかが芝生だろう」という認識になって欲しい。全ての保育園、幼稚園、小学校、中学校、高校、大学、グラウンド、公園、空き地が全て芝生になっている日になって初めてそうなります。

死ぬ前にできるかどうかは皆様次第です。